思い出の記

宮　静孝
（昭和13年卒）

（一）大沢川原もとおく

昭和八年四月第八回生の入学式がいとも厳粛に行なわれた。式場は今の岩手女子高校講堂、所は大沢川原小路、入学を許可された者およそ一一〇名、第二次募集で締切られた。私はその第二次募集で入った。甲乙二組の教室に編入され担任から諸注意事項を申し渡され、おどおどしながら式場に導びかれた。紅白に張りめぐらされた幕、ずらりと威儀を正して整列している職員父兄並びに上級生を身近に感じ、頭は坊主刈り紅顔の美少年は身をこわばらせながら席に着いた。確か壇上には石版刷りで墨痕鮮かに太書の字で積慶、重暉、養正の三幅の掛軸が垂れ下っていた。式は順を追うちに新任教師の紹介に入った。この時初めてさきの教室での担任が牟岐、山中の両教師で新任である事を知った。同時に佐々木哲郎校長も新任と紹介された。好むと好まざるとに拘らず各自思い思いの部に編入させられた。登校時の服装は晴天時は編上靴に巻脚絆、雨天時は教練なき限り随意。上級生の一部には高足駄に雨合羽、または唐傘など反体制を気取って歩行する姿は今も昔も変りがないようであった。五里霧中の数か月は経ち校風もやっと解り掛けると、四五年生は殿上人、三年生はよき保護者、二年生はいじめっ子と相場が決った。校舎の両隣りは菓子店だった。食欲をそそりそうな大福が陳列され、先輩の中には休み時間秘かに塀を乗り越え御用に及んだとか、目的は大福ではなく店の女の子だったとか、「中津川のせせらぎにわれ泣きぬれて……」と詠って先生からほめられた先輩もあったとか、入学当初の学窓は多士済々で狭きながらもよきたたずまいであった。

（二）意気をかたどるうれしさよ

随分と対外試合があった。そのつど応援に狩り出されたが、部員の私は免除されることもあった。試合に負けた時は即刻点呼となり、団長監督の下幹事に気合を入れられた。勝てば次の日の朝礼の時に国旗掲揚と校長挨拶。終って優勝部の報告となる。優勝旗ありカップありで一同壇上ともなれば全校生徒及び職員の士気はいやが上にもあがることになる。弓道部はその点伝統的に強かった。応援歌練習もすごかった。声が小さいと学年を問わず前に出されてしぼられた。声を張り上げ寧ろ周囲の督戦隊に気をつかって腕をふった。岩中精神はまず応援団から植えつけられた。部には進んで入る者、しぶ〳〵入る者の二様がある。私は好きで入ったのだから途中から逃げ出す訳にいかない。いざ防具を着け上級生の御指導に与かれば上手に打たせてくれる人、思い切り撲る（そんな感じの）人、一々講釈に及ぶ人皆それぞれだ。結局は積極的に相手を選り求め（これが仲々難しい）て稽古すればそれだけ早く己のものになる、どの道やる気が大事と教えられた。爾来多少共勉強の仕方が変って実が入るようになった。

（三）友よ心の目にも見て

本来学力の向上は教場をもってその主戦場とすべきなのだが、私の場合家庭も第二の戦場であった。あまり結構ではないが、放課後のクラブ活動と対外試合に時間をさかれ自然とそうせざるを得なかった。当時のＰＴＡは何と見たかは解らない。予習復習を厳しく実行するためには授業時間内ですべてをマスターしてしまう程頭のできはよくなかった。帰宅すると夕食までの間のこと夕食後の体（特に頭）の調整のこと休息時間など七人兄弟の中で実践することなのだから学校以上めんどうなこともある。時には春木場の舎生諸君がうらやましくも思えた。皆が寝静まってから深夜に及んでどうやら予定の科目の整理がついた。「友あり遠方より来る亦楽しからずや」で時々遠近の友を招き書籍を携えて来てお互の理解の度を確認し合ったりしたのもこの頃である。他方学校側でも思い切ったことを実行した。各期末試験にはその結果を成績順に張り出したのだ。確か私の在校期間は続けられたかと思っているが、その後どうなったかは聞いていない。あの時の上級生下級生それぞれに複雑な表情ではあったが、結果はこれを有利に指導する側の能力いかんにあった。五年の後半には進学組と就職組とに分けられた記憶がある。私は進学の乙組であった。クラブは後輩の指導もあり休めなかった。「トラの巻」は参考書のうちに入らなかったし、点取虫になるより本食い虫にならないよう身体にも気をつけた。課外授業で国漢英数の各大学共通の出題傾向に基づいた問題を四、五年生で受けたことがある。その時四年生の中からでも五年生をしのぐ強者が現れ、そんな時、頭は使い方次第だとよく考えさせられた。

腕白小僧世に何とかで授業中満足に講義を受けず威張っているのが学年委員長の苦労の種。そんな時威厳と寛容とをもってその場を仕切ってくれ

た教師は常に生徒より慕われた。在学五年の間、随分と先生方の出入りも多かったが、生徒は教室で教えられる事以外からも多くをその先生から学ぶものだと思った。当時の佐々木哲郎校長の御苦労がしのばれた。私は常に舟をこぐ側の生徒だった。いつ頃だったか黒板の字がよく見えないので机を教室の最前線へ出させてもらった。不思議と眠くなくなった。どうしても上と下のまぶたが重なろうとするのでその場に立たせてもらったこともある。勇気のいることだった。お互前後左右注意して未然に先生のお叱りを防いだことでもあった。

(四) 日々につとめて光栄を

当時は国民皆兵で兵役は国民の三大義務の一つであった。学校では教練、武道などをもってこれにこたえた。但し身体の具合の悪い者はそれを免除された。団体訓練、指揮法など、武道では礼儀作法などが尊ばれた。三年の後半いわゆる二・二六事件なるものが起ったのもこの頃である。軍国色がようやく濃くなり始めて来た。教練の成績が抜群ということで、当時小林島司配属教官の後を受けて教官になられた村井権治郎中佐の時、歩兵三一連隊大隊長であられた秩父宮殿下の本校御台臨があった。職員は勿論生徒も上下一体となって御迎えした。光栄これに過ぎるものは無かった。理事長三田義正翁の晴れがましい姿が印象的であった。私もこの時小笠原哲二先生の御指導で絵画を御覧に供したことを覚えている。(亀が池より公会堂を望む)

恒例の年中行事に岩手山登山があった。「皇風永扇、校運隆昌」頂上には我が中学の守り神が鎮座ましまして御座った。卒業間近に新校舎が今の仁王田甫に新築され、時の奉安殿は我々の手で引いた。雪道を相当大がかりで御移転申し上げた。以上回顧すれば思い出は尽きぬ。在校五年ではあったが我が青春の基礎を築いたこの五年は誠に貴重な五年間である。そこには共に学び共に歩んだ犯し難い人世訓が生きていた。今私はひたすら勉学に励み得たあの学園を讃え、師の恩に感謝すると共に、三田理事長にも心より感謝している。昭和十三年三月母校を後にした者この時既に六十名に減っていた。

あれから四十年いや五十年、時世の推移に伴い人心は大本を忘れ、たとえ敗戦による心の痛手によるとはいえ、互を責め、目に見える山河の荒廃には嘆き悲しむけれども、自らの心の変革には気づかざるもののごとく、教育もまた果して「教えざるの罪」にあらざるかの感を強うするものである。建学の精神私学復興の光栄果していつの日ぞ。

柔道部の歩み

赤坂俊夫
(昭和14年卒・柔桜会会長)

岩手中学校当時の道場は中津川畔で、春には桜が咲き、すぐそばを清流が静かな音をたてて北上川にそそぐ、その石垣のそばにあった。体育館とは名ばかりで、戸はこわれ窓ガラスもない粗末な道場であった。初代の柔道の先生は広島先生であり、広島先生辞任のあとは体操の谷口、中條先生が指導に当った。

昭和三年十一月十八日、第一回振武大会への参加が、わが柔道部の対外試合のはじまりであった。創部日尚浅く、この大会では岩手師範に惨敗した。しかし翌年の同大会では準決勝に進出する躍進ぶりであった。石井、松浦、佐々木、そして武田、鎌田先輩らの築いた時代である。

昭和七年四月、宿敵岩手師範との対戦では三対三で引分けた。中島、佐々木、宮崎、荒沢、松田などの三年生が主力であった。その後いろいろの大会があり、個人的には阿部(倉)、金田一、作田、あるいはそのあとになって伊藤など、特異的な技で注目をあびた部員がいたが、新しい歴史と共になかなか上位への進出は望めなかった。

昭和十一年より菊地先生が教導をとった。合宿、寒稽古、暑中稽古など練習量も多くなり、着実にその実力は向上していった。道場も中津川畔より長町へと移り、新しくなって柔道場と剣道場が始めて別れた。柔道の先生も菊地先生から細川先生にかわり、戸嶋、牟岐先生なども稽古に加わり次第に熱が入っていった。

昭和十四年には総ての大会において決勝まで進出した。これは柔道部発足以来初めてのことであった。だが伝統が短く、浅い経験がわざわいして優勝戦で敗れている。石杜、中村、菅原、堀切、斎藤、赤坂の時代である。勝ちそうで勝てない時代が続いて、昭和十六年十月苦節十五年明治神宮国民大会岩手県予選で初めて優勝している。東根、佐藤(幸)、大志田である。この優勝経験が大きい力となり、翌十七年七月橿原神宮岩手県予選でも連続優勝している。菊地、赤坂(祐)、藤沢、工藤、佐藤(幸)、などである。

こうして全盛時代を迎え、後藤伯記念館大会、

県下中学校大会など各大会に優勝し、個人戦でも佐藤（幸）が制覇している。そして戦争も激しくなり終戦まで次第に柔道も下火になって行く。

戦後柔道は禁止され、大きいブランク時代を迎えるが、昭和二十八年戸嶋先生などの尽力と三上（達）などによって道場が再開されてゆく。

戦争末期の全盛時代より戦後の空白時代を経て、昭和三十五年に盛岡一高の八十周年記念大会で初めて優勝している。高橋、和合、佐藤（正）、佐々木、沢田らである。実に二十年振りの快挙であった。その後、昭和四十年県体地区予選（三上、滝田ら）、昭和四十一年市民大会、同県民大会などで阿部（旨）、武藤、藤根、小山田らが優勝し、やがて第二の黄金時代の昭和四十三年を迎える。

戦後初の高体連の優勝をはじめ、市民大会、十人制勝抜大会、民警大会などすべての大会を制覇している。向井田、工藤などの活躍した時代である。

その後また雌伏の時代に入る。入学生徒の減少、高校の増設、クラブ活動への情熱の低下など色々の條件はあるものの、長い伝統の歴史と、柔道精神に燃し続けてきた焔が再び燃え上がる時も遠くないものと信じる。

母校柔道部発展の糧となるため、その後援会なる柔桜会が発足し、会員約三百名、今現役と先輩が一丸となって石桜柔道部の発展と活躍に邁進している。そして苦節五十年の花が今大きく咲こうとしている。

三田翁の憶い出

牟岐喆雄

（昭和8年から21年まで本校教諭）

先日、山中先生から「同窓会報に掲載するから故三田前理事長の憶い出を書いてくれ」との依頼に接しました。豊かな個性をもった実業家、経世家、教育家である翁を語るのはむずかしいことではない。況んや誰よりも恩顧と知遇を受けた自分である……位いに考えて簡単にお引き受けしましたがペンを執って見ると、之はとんでもないことになったと思って居ります。

御生存中は大きく打てば大きく響く偉大な存在であったことは翁に接したすべての人の感ぜられたことと思います。翁亡き今、どうして自分如きものがその真実の響きを伝えることが出来るか……非力その任でないことを感じたからです。翁の大きな翼に抱かれた私ども家族、あのことこのこと、いろいろと温情を寄せて下さった翁、そしてそれに甘えた私達、今思い出すとその図々しさを恥じると共に恩愛の深さに涙したい衝動に駆られます。然し翁の像を油絵に描く自信はおろか、簡単な鉛筆画も覚つかないのです。

私が翁にお会いしたのは岩手中学校に漢文の教師が必要だというので白羽の矢が私に向けられたときに始まります。仁王小学校の訓導であった私が当時岩中の教頭鈴木勝二郎先生に伴われて内丸のお宅にお邪魔したのは昭和三年の暮れも迫った十二月半ば、かねて噂は耳にして居ましたが始めてお目にかかる三田翁、それに翁とは亡言の友である富田小一郎先生も同席されて居りました。

「岩中の教師に来て欲しいがそのためには東京に行って勉強してくれ。学費は岩手奨学会から…」というお話でした。鈴木先生は私の将来を案じてか、「卒業するまで間違いなく送金するという一札を……」と恐る恐る話されましたところ翁は頭上から一喝「俺が出すと言ったら出す。証文が何になる…」正に千金の重みでした。鈴木先生は当時県教育界の長老、私どもの大先輩でありますが、この頂門の一針に平身低頭、その非礼を詫びたことは言うまでもありません。私はそのとき三田翁はかなりきびしい人だと思いました。この印象は間もなく完全にほぐれましたが今でもその場の光景が強く胸に焼きついて「男子の一言……」などと柄にもなく胸を張りたい気持に駆られるときもあります。

こうした経緯から私の東京での生活が始まったのでありますが、翁が東京に来られる度に私を呼んで「日本橋のすしを食べて見ろ」「学費は十分か」「家族を呼び寄せてはどうか」と溢るる慈愛のお話をいただきました。そして翁のポケットマネーが私の臨時収入になったり、家族と東京での生活が出来るようになったのであります。勿論生活費一切は翁の心配によるものです。私事に亘って恐縮ですが翁と私との関係は単に理事長と教師というだけではなく、筆舌以上の恩顧を受けて居ります。そして翁亡き今も現理事長御夫妻によって私の子供達は肉親以上のお世話を受け、どうやら夫々一人立ちにさせていただきました。そのために殊更に翁を祭り上げてという考えは毛頭ありません。そんなことをすれば翁に叱られることを

百も承知して居ります。唯こうした関係を抜きにしてはペンを進めることは出来ませんので、この程度のことはお赦しいただきたいと思います。

前述の通り翁にはいろいろお世話になりました。然し世の中には世話をする人も数多く居ると思いますけれども「生きる張り」を与える人は幾人あることか……です。

翁には成程きびしい一面はありました。ドイツ式の観念論所謂考えるために考えた議論ではなく、広い視野と将来の洞察に於いて現実に立脚した議論……事実の考察から生れた痛烈な理論をもって誰彼の区別なしにそのものズバリというきびしさ、そうした一面はありました。そしてその反面汲めどもつきぬ深い愛情のあったことも否むことは出来ません。そうして数多くの人々を世話されたことも衆知の通りです。だが多くの人達と違うところは叱っても、慈しんでも相手に生きる張りを与える……之が他の人達と違った翁の偉大な点であると、翁を私はかく見ているのです。

私は現在でもよく生徒に三田翁は育てる心に徹した人だと話をします。岩手中学校を創設されたのもこの心、更に当時東北一と称された寄宿舎を建てられたのもこの心、殊に翁の教育に対する理想を端的にあらわされたのは寄宿舎だと思います。父兄と寮のむすびつき、教師と寮生とのつながり、寮生の指導を考慮しての貴賓室、母校を慕って来る卒業生のための宿泊室、こうしたことを考慮しての施設設備、実業家の中には専門家以上傑出した教育家が居る……之は私が翁によって発見したものの一つであります。紙面に限りがありますので詳しく書くことは出来ませんが、要するに翁の相手に生きる張りを与えるための世話と、育てる心とは二にして一、一にして二という表裏の関係であり、そして之は人間関係とか教育上の問題だけでなしに翁の一切の事業にもあらわれて居ると思います。砂利だらけの元の蛇の島、植林の際のソロバンを抜きにした下刈、それが今日如何にすばらしいものになっているか、無心のものにも生きる張りを与えられたのであると思います。

かって校舎が大沢川原にあった頃、山中先生と私が翁に呼び出され、「校舎を新築するからお前達二人で設計せよ」と言われたことがあります。そんな経験のない私どもでありましたが理想的な校舎を……というので建築費が多すぎると叱られるのを覚悟で若い夢を設計に盛り込んで翁に出しました。

案のじょう「贅沢過ぎるからもう一度練り直せ」という厳命です。覚悟の上とはいゝながら「奮発ってくれてもよさそうなもの…」とあさはかにも考えたのでした。そして談たまたま生徒数のことに及ぶと、「そうか。それでは之は狭すぎる。こんなことでは駄目、もっと坪数を広く……」とまるで私どもの失策を責めるという態度でした。叱られても嬉しさに泣く……翁の背後に後光が射しているようで止めどなく涙が出て来ました。こうした「生きる張り」を与えられたことが幾度あったことか。

よく世間では翁には先見の明があったと評する人が居ます。語感からくるのかも知れませんが、翁には時流を見通してというようなある意味での才走ったところはないと思います。

開拓精神の旺盛な人、時代を創造する人、不屈不撓意志の人、信念の人という表現で翁を見たいと思います。成程、林業の開発にせよ、大盛岡発展の基礎となった南部土地会社の設立にせよ。その他翁の事業行くとして可ならざるはなしであります。けれども之をもって先見の明と結論づけることは同意しかねます。時流に妥協して二歩前進、三歩前進という翁では決してなかったと信じます。

翁逝いて二十有七年、全く烏兎早々です。憶い出の糸を手繰れば泉の如く、なつかしさ一色に染められたいろんなことが次から次と湧き出て来ます。大往生された昭和十年十二月三十一日、あの場の光景を憶い出すと何故かしら熱いものが頬と頬を伝わるのを感じてなりません。

偲二三田翁一

温情如レ父恩似レ師ニ
追一思シテ往事ヲ一涙沾ホスレ衣ヲ
翁逝イテ魂魄今何クニ在ル
久昌寺畔晩鴉悲シ

牟岐　保軒

（石桜同窓会報二号所載）

〔編集部注〕

牟岐喆雄は、本校の発展期を支えた献身的な教師の一人である。岩手師範学校を卒業後、仁王小学校の訓導となったが、三田義正翁に認められ、東京の二松学舎に学んだ。岩手中学校に着任し、漢文を担当した。その不抜の信念に裏づけられた厳格さには定評があった。

岩中を去ったのち、県内の高校の教頭や校長を歴任したほか、県教育委員としても活躍した。